

---

# ゼロの使い魔異伝 ゼロの未来忍者

tonebon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔異伝 ゼロの未来忍者

### 【Nコード】

N1265BA

### 【作者名】

tonebon

### 【あらすじ】

平賀才人がエルフにさらわれ、竜の巢近海にてエルフ水軍と戦闘に入った時、はるか東方より、恐るべき奴らが出現しようとしていた。

機械忍者「クロサギ軍」。才人はすべてを守るため、決意した。そして…。##マイナーなクロスですが、ゼロの使い魔と未来忍者のクロスSSです。前編・中編・後編の3部作予定。Arcadiaのチラ裏にも習作として投稿しております。

01 前編 「そのもの、東方より来たりて」 (前書き)

ゼロの使い魔原作20巻の途中より改変しています。ご注意ください。  
い。

## 01 前編 「そのもの、東方より来たりて」

「まったく、なんでこんな事になっちまったんだろうな！」

ウォータージェットとスクリューの2軸の推進力をえて小型哨戒艇が波を切り裂く。

砲撃音。そして、右舷ギリギリに水柱が立つ。

「うおっとお！」

才人はガンダールヴの能力により、この小型哨戒艇の操縦法を理解していた。

思い切り操舵輪を回し、船を急転回させ、敵艦の前を通過する。

巨大な鯨のような巨体を持つ竜の上に砲塔と艦橋を載せたエルフの戦艦「鯨竜艦」。

それが四隻も陣形を組んでいるのだ。

抜けるような青空と南国を思わせる強い日差し。

コバルトブルーの大海原。

本当ならリゾート気分で日光浴でもしたいところだ。

ルイズに召喚されてからの苦勞を癒す神様からのプレゼントか。

しかし、今の才人は空気を切って飛んでくる砲弾のプレゼントを捌くのに必死だった。

USネイビーの小型哨戒艇を操り、波を切り裂いて左右に回避する。

「遅せえ、遅せえ！ 地球の軍船の機動力をなめんな耳長ども！」

才人はスロットルを全開にして操縦席に立った。

肩にロケットランチャーをかまえ、足で操舵輪を操作する。

「破壊の杖を思い出すね！ さっきのRPG7はたいして効き目がなかったけど、

こいつはどうだ！」

シュポンと栓抜きのような音がして、白煙を引きながらロケット

が敵艦に吸い込まれる。

竜鯨艦の艦橋の根元が轟音と共に爆炎を吹いた。

「ひゅー！ 死傷者、でちまったかな！」

「そりゃ、運が無いやつは死ぬよ、相棒！ 戦いつてなそういうもんだ！ 知ってるだろ」

爆炎と煙の中から竜鯨艦の艦影が見えたとき、更に激しい砲撃が飛んできた。

主砲だけでなく、多数ある小口径の砲を含めた一斉射撃だった。

「うわっ！ しぶてえ！ ダライアスのグレートシングかよ！」

扇状に巨大な水柱が立つ中、小型艇を急転回させて回避した才人に海水が滝のようにかかる。

「相棒！ グレートなんたらってなに！？」

背中 of 日本刀に宿るデルフリンガーの問いに、首を振って水を切りながら才人は答えた。

「ごめん！ 俺の世界のゲームの話よ。でも、このままじゃギリ貧だな！」

「もう竜の巢のハーフの嬢ちゃん達は逃げられたんかね？」

竜の巢の洞窟にテファとルクシヤナを残し、単騎で飛び出した才人だった。

もちろん、囿になるため。

「しかし、相棒。ハーフの嬢ちゃんにひでえ事言ったね」

「しかたないだろ！ テファをこんな危険な目にあわせられるか！ 両舷に水柱が立ち、大きな波を小型哨戒艇が切り裂いて飛ぶ。

着水後、続けて唸りを上げて飛来した主砲弾を左に舵を切つて交わす。

「うひゃ！ 近かった！ アブねえ！ テファには後で謝るよ！ 謝るのは慣れてる！」

そうさ、ルイズにいつぱい謝った、俺。

ハルケギニアに召喚されたばかりの時は高慢ちきなルイズ様の横

暴で。

その後は…俺が悪かったんだな。  
とにかく俺ほど謝ったガンダールヴはいないよ、たぶん。

才人がそんな事を思った時、ふと、気配がした。

海戦の場から東方の水平線に大きな塔が見える。

エルフの国「ネステフ」の首都「アデイル」にそびえる塔「カスバ」である。

その塔の方から気配がしたのだ。懐かしい、愛しい、ルイズの気配が。

「ルイズ!？」

次の瞬間、塔のすぐ横の空間に巨大な光の珠が発生した。

「あ、あれはルイズの「爆発」だ!」

間違いない。あの光の珠は、タルブの村の上空でアルビオン艦隊を消滅させた光だ。

「ルイズだ! ルイズが来てくれたのか!」

ルイズが来てくれた! 才人は助けを待つ姫のごとく喜びの笑顔をつくった。

「え!？」

しかし、その笑顔が曇った。

カスバの塔の更に向こう。

薄く山々のつらなりが見える遠方の空が、突然真っ黒に染まったのである。

暗黒の入道雲がまたたくまに天頂まで覆い、稲光が走る。

暗黒。それは文字通り、光を遮る漆黒の邪悪な気配だった。

瞬間、小型哨戒艇をかすめ、雷光が走った。

「な、なんだ!」

そして轟音。才人が振りかけた先で、エルフの鯨竜艦がまっふたつになって轟沈していた。

ま、まさかあのしぶとい艦が一瞬で?

空に異様な音が響く。

才人の頭上を黒い影が通り過ぎた。  
それは屋根。

「や、屋根が飛んでる……」

日本の木造家屋の瓦屋根。それが二つ組み合わさったような物体が空を飛んでいた。

その屋根のような飛行物体から一つの影が舞い降りた。

小型哨戒艇の後部に音もなく着地したそれは。

「き、機械の忍者？」

忍者を思わせる黒装束なのだが、細い身体の手足の先は機械的な手甲と履物だった。

黒い細布でぐるぐる巻きにした頭部の布の隙間からのぞくスコップ。

機械的な駆動音。

一目でわかった。

これは人間では無い。

ハルケギニアで見てきたどんな物とも異なる、異質な存在。

「なにもんだ、ため」

才人の叫びはそこで止められた。止めなければならなかった。

機械の忍者が手を前方に向けた時、光が走ったのである。

才人は反射的に背の刀を抜き、光を切り払った。

きいんと音がした後、光は船の床に突き刺さった。

それは薄い光を放つ手裏剣だった。

いくつもの戦いを経験した才人の身体は反射的に動いていた。

機械の忍者の懐へ。

下から切り上げる刀の先には敵影はなく、頭上を黒い影が飛んでいた。

しかし、ガンダールヴの動体視力がそれを追尾する。

斬り上げる刀はそこで止まらず、振り向きざま、黒い影の着地点を横に薙ぎ払う。

鉄と鉄がぶつかり合う音。  
刀をもつ両腕がしびれる。

才人は直感した。

こいつは手加減できる相手ではない。倒さないといけない敵。  
なんでこんなところに出てきやがる！

才人の怒りは心の震えとなり、左手の甲のルーンからあふれた光  
が刀をまとう。

「このやる！」

才人は刀を振り切った。

『ウギイツ』

機械音が響き、黒い影が切り裂いた線を支点に一回転する。  
才人の斬撃は機械の忍者の片脚を切断していた。

機械の忍者が着地に失敗してふらついた時、瞬時に距離を詰めた  
才人の蹴りが飛ぶ。

水柱をたてて、機械忍者は海へ落下した。

才人は小型哨戒艇の上に残された機械忍者の片脚を見た。

「ほんとに機械かよ……」

切断面には精巧な機械が明滅し、うごめいていた。

肩で息をつきながら、竜の巣の方向を見る。

エルフの艦隊が空に浮かぶ瓦屋根からの電光を受け、爆発炎上し  
ていた。

その炎の中を飛び交う黒い影がいくつも見えた。

さっきの機械忍者だ！

テファヤルクシヤナはどうなったなのか。無事に逃げられたのだ  
ろうか。

心配になった才人は小型哨戒艇の進路を竜の巣へと向けようとし  
た時だった。

”安心しろ、蛮人。ルクシヤナ達は保護した”

突然、頭の中に声がした。



「念話だね、相棒」

続けて海面を切つて海竜が現れた。

竜の巢で原子力潜水艦を発見した時に戦った海竜だった。

そして海竜に引かれ、繭のような円筒状の船が海面に現れた。

呆然とする才人の前で円筒状の船の側面のハッチが開く。

そこから現れたのはエルフのアリイーだった。

気難しそうな雰囲気をもつ、端正な顔立ちのエルフで、ルクシャナの婚約者である。

「てめえ、テファはどうした！」

「安心しろ、ルクシャナと一緒に保護した」

アリイーの後ろで、美しい金髪を揺らしながら、優しい顔立ちの少女がおどおどと覗いている。

「テファ！ 無事だったんだ。よかった！」

「ご、ごめんね、才人。あ、足手まといで…」

才人は泣きそうになっているティファニアの顔を見て、焦った。

「ご、ごめん。ち、ちがうんだ。テファを危険な目にあわせたくなかつたんだ！」

そこへ別の金髪が美しいエルフの少女が顔を出した。

つりあがった切れ長の瞳に、無造作に切りそろえられた長い金髪。

好奇心が身体からあふれでているようなエルフの少女、ルクシャナであった。

「あんたち、急いでよ！ 「キモン」がこっちへ来るわよ！」

「キモン!？」

才人は突然出た聞きなれない言葉を聞きかえした。

「急げ蛮人。こっちへ乗り移れ。その船では「キモン」にいつかやられる」

空から異様な飛行音が聞こえてきた。

振り返った才人の視線の先で、瓦屋根がゆっくり方向転換し、こちらへ進路を変えようとしていた。

「あ、あれ？ あれが「キモン」ってやつ？」

「いいから速くしろ！」

アリーの急かされ、小型哨戒艇に載せてきた武器を持てるだけかかえ、才人は円筒形の船に飛び乗った。

船内はみかけより広く、中には数人のエルフがいた。

「急速潜行！ 急げ！」

瞬時にハッチが閉じ、がくんと船体が沈んだ。

そして、頭上から爆発音がした。

小型哨戒艇が「キモン」に破壊されたようだ。

船体が哨戒艇爆破の影響で振動する。

「ふう…やつらは海中には手出しできないから、ひとまず安心だ」

「つて、おい！ お前らにさらわれてから、わけわかない事ばかりじゃねえか！」

説明しろ！ あれ、なに？ 機械忍者がいたぞ！ 「キモン」つてなに！？

アリーの胸ぐらをつかみ、一気にまくし立てる才人はうずくまるテファを見た。

テファは右足に包帯を巻いていた。

「ど、どうしたんだテファ！ その傷は！！」

そこで、ルクシヤナも左腕に怪我をしている事に才人は、気がついた。

「ど、どうしたんだ？ なにがあっただよよ！」

「落ち着け。お前が困になって戦っている時に、別働隊が洞窟に入ったんだ」

才人は血の気が引いていくのを感じた。

やつら、別働隊を組んで組んでたのか！ 俺の困は無駄だったのか！

「だ、だれだ？ テファ達にこんな怪我させたのは？」

そこで、船室の済で縄に縛られているエルフの少女がいる事に気がついた。

顔立ちがテファと瓜二つ、美しい金髪もそのままだが、顔立ちは

険しく、胸がぺたんこだった。

縄にしばられてはいるが、この少女も怪我をしているようで、荒い息をして気を失っていた。

「こ、こいつか!」

「う、うん…サイト。その子、わたしの…母の一族みたいなの」「  
ティファニアが悲しそうに言った。

「テファのお母さんの一族…? じゃあ、テファの親戚がテファに怪我させたってのか?」

その問いにはアリーが答えた。

「ああ、その少女が別働隊を指揮していたみたいだな。

間違いない水軍の「鉄血団結党」の一員だな」

「鉄血なんたらってなによ!?!」

「我々も一枚岩じゃないんだよ。お前ら”悪魔”を殺してしまえと唱える過激な派閥さ」

「な、なんだって…」

「”悪魔”は殺したら次の”悪魔”が生まれる。

「鉄血団結党」は”悪魔”が生まれ変わるのなら、

生まれ変わるたびに殺せばいいという思想を持っていてな。

お前ら野蛮人を皆殺しにしようとも思っているようだな」

才人は青ざめた。

エルフは虚無の担い手とその使い魔を殺せないと思っていたからだ。

「その少女が別働隊を指揮して、ルクシヤナ達を攻撃したんだ。

で、そこにキニン達が襲撃してきた」

キニン。

才人はその言葉に反応した。

「そ、そうだ。キニン。キニンって、あの機械忍者やキモンの奴らの事?」

「ああ。ここ最近、東方からやって来るようになった奴らでな。

今まではあのキモンがたまに飛んできて小規模な戦闘になるだけ

「だつたのだが」

「と、東方？」

「ああ、東方からだ。奴らは「クロサギ軍」と呼ばれている」

そこに、突然脳裏に言葉が響いてきた。

”アリイー、聞こえるか？”

才人はその声に聞き覚えがあつた。

タバサを助けた時に戦つたエルフの戦士の声。ビダーシャルだ。

「伯父さま！」

「遠隔念話を使うなんて…緊急事態ですか！？」

アリイーの焦つた反応を見て、才人は様子を見る事にした。

”ああ。クロサギ軍の奇襲を受けてな。制空権は奴らの物となつた”

「なっ…ネフテスは…カスバは大丈夫なのですか？」

”予定通り、蛮人の国へ逃げ延びる。それから、蛮人の戦士よ”

蛮人の戦士。

ビダーシャルは才人をそう呼ぶ。

「な、なによ？」

”残念だが…君の仲間がカスバに突入してきている。

今はキニンの襲撃にあい、共に戦っているところだ”

才人は、先ほどの海上戦闘で感じたルイズの気配を思い出した。

やっぱり。

やっぱり、ルイズが。ルイズ達が来てくれたんだ。このエルフの

首都に。

「それを早く言え、バカエルフ！ アリイー、この船の進路をカスバに向ける！」

01 前編 「そのもの、東方より来たりて」 (後書き)

中編へ続く

## 02 中編 「不知火のごとく」

月夜の晩、ド・オルニエールの屋敷は元素の兄弟による襲撃を受けた。

エルフはその戦闘の直後に介入し、才人を、そしてティファニアを拉致し、エルフの国

「ネフテス」に二人を連れ去ったのだ。

虚無の担い手・虚無の使い魔：すなわち、”4つの4”を揃わせないために。

才人とティファニアはエルフの”心を奪う薬”を飲まされる運命にあった。

その二人の運命を覆し、窮地を救ったのが、エルフの少女「ルクシャナ」だった。

ハルケギニアを研究する学者であり、好奇心旺盛なルクシャナは才人とティファニアを

「竜の巣」にかくまってくれたのだ。

その場所で、才人は地球製の武器や、小型哨戒艇、そして原子力潜水艦・核兵器を発見する。

「竜の巣」へ逃げる途中、日本刀に宿る形でデルフリンガーも復活した。

「海母」という水韻竜とも出会う事ができた。

そんなところへエルフ水軍が襲撃してきた。

才人はティファニアとルクシャナを逃がすため、小型哨戒艇を駆り、囷になるのだった。

その瞬間から少し遡る。

赤と蒼の輝く蒼月の夜空の下で、巨大な鳥が飛んでいた。

鳥ではない。大きすぎる、そして、速すぎる。

翼長は100メートルを超え、機体後方に向いた3基のプロペラと蒸気機関の轟音を引いて飛ぶそれは、  
”竜の羽衣”を参考にコルベールが設計した「オストラント号」である。

すでにオストラント号はゲルマニアの国境を越え、エルフの勢力圏内を飛行中であつた。

才人とティファニアを救出するための強行突入である。

一回目のエルフ艦との遭遇戦は竜騎兵との戦いになり、タバサとキュルケの活躍によって突破した。

二回目の相手はエルフの戦艦だつた。八門の大砲を備える火砲を突破できたのは、エレオノールによる、

奇跡的な、神業的な操舵技術によるものだつた。

マリコルヌがエレオノールをうまく操作した結果、とも言えたが。

そんな突破戦の船内の一室で、ルイズは震えていた。  
急回頭にあわせ激しく揺れるベッドの上で、桃色の長い髪がゆれる。

魔法学院の制服の肩が砲撃音におびえ、震えている。

”やっぱりサイトがないと、ダメなんだ。わたし”

黒のサイハイソックスの膝を抱え、うつむく。

みんなが戦っている。わたしも戦わなきゃならない。

それはわかつていた。

いままでも危険な目にあつてきた。戦いの場を乗り越えてきた。

しかし、それはそばにサイトがいたから。

そのサイトがエルフにさらわれてしまった。

今、この船はサイトを救出するためにエルフの首都へ突入している。

しかし、エルフの薬を飲まされて…もし…自分をわからなくなつていたら。

壊れた人形のようになつていたら。

別人のようになっていたら。  
サイトでなくなっていたら。

ルイズは才人と誓いあった夜を思い出していた。  
ガリアの城内の噴水で、おたがいに生まれたままの姿で、抱きしめあった事を。

身体の内ももりを感じ、好きな人が生きている事を実感した事を。  
死ぬ時は一緒と誓った、あの夜の事を。

もしサイトが壊れていたら…わたしはきつと耐えられない。  
嗚咽がこみ上げ、鳶色の瞳が涙に濡れた時だった。

「さ！ ご飯ですよ！」  
戦場の空気を吹き飛ばす、明るい声でシエスタが扉を開けた。  
「ご飯なんか食べている時じゃない。」

そうルイズは答えたが、明るく振る舞うシエスタの言葉に衝撃を受けた。

「食べなきゃだめです。ミス・ヴァリエールはこの救出作戦の要だからです！」

シエスタに才人がどんなにルイズが好きか吹きこまれ、ルイズは”要”として立ち上がった。

そうね、サイトは誰よりもわたしが好きなのよね。  
タバサよりも、シエスタよりも、姫さまよりも。

そうだわ。シエスタの言うとおり。  
もし、サイトが壊れていたとしても、三人でひっそりと暮らす。  
それでロマリアが襲ってきたら、戦う。

もし死ぬなら…シエスタとわたしとサイトで天国へ行きましょう。  
う。

精神力を小さな身体にみなぎらせ、ルイズシエスタと共に船室の



扉を開け、甲板に出た。

いつのまにか夜が明け、強い日差しが振り注ぐ。オストラント号の船首からの強い風が桃色の髪とマントをなびかせる。

地平線にエルフの首都にそびえる巨大な塔が見えた。

そして、その手前に浮かぶエルフ艦隊。その船影は十六隻。

コルベールは思った。

おかしい。エルフの軍艦の数が首都防衛の戦力にしては少なすぎる。

こんな船の強行突入など、問題にしていないのか？

もしくは、他に戦力を回さねなければならぬ理由があるのか？

しかし、コルベールはルイズの姿を見て決断する。

首都は目の前なのだ。

そして、十六隻とはいえ、その防衛網を突破するには奇跡の業が必要だろう。

「それではいよいよ…彼女の出番のようだね」

甲板には全員がそろっていた。

コルベール、ギーシュ、エレオノール、マリコルヌ、キュルケにタバサ。

ルイズは全員から自信が湧いてくる言葉を貰った。

自信と精神力に満ちたルイズは美しかった。

ルイズは船首に立ち、杖を引き抜く。

「さて、耳長さんたち。わたしの使い魔を返してもらいに来たわよ」  
目の前に陣形をとるエルフ艦隊を吹き飛ばし、愛する使い魔を救う。

それはルイズにとって、確定した”未来”だった。

エルフ艦隊十六隻の中央に小さな光が生まれ、瞬く間に巨大な光の珠となった。

艦隊の中央に、突如、太陽が出現したかのようにであった。

そして爆風がエルフ艦隊を襲い、火災を発生させながら、エルフ艦がゆっくり降り降下していく。

船を浮遊させる”風石”が消滅したためだ。

虚無の魔法、”爆発”。

ルイズが本気で”爆発”を放つのは、タルブの村でのアルビオン艦隊戦以来だった。

「サイト…まっつて…必ず、助けるから…」

精神力が切れたルイズは眠りに落ちた。

サイトと再会する”未来”を信じて。

ルイズがぐらりと倒れこむのを見て、エレオノールが慌てて妹の身体を支える。

「さて、いよいよ本番だ。みんな、準備はいいかね？」

コルベールが首都にそびえる塔を指さし言った。

炎上するエルフ艦隊から立ち上る煙を切り裂き、オストラント号が防衛戦を突破する。

巨大な塔「カスバ」が目前に迫った時、マリコルヌが叫んだ。

「せ、先生。あ、あれはなんでしょう？」

カスバの塔のさらに先。

遙か東方の山々の影が見える地平線の先から黒雲が立ち上ったのだ。

”遠見”の魔法で見たマリコルヌの眼には異様な物が写っていた。東方風の屋根を持つ小屋にゴーレムのような細い脚が生えた巨大な物が無数に立っていた。

その手前を黒い波が進んでくる。

いや、波ではない。

マリコルヌは”遠見”の魔法を強め、倍率を高めた。

人影。いや、人のようなもの。

黒装束、頭までも黒い布でぐるぐる巻きにした異様な人影だった。

前かがみに両腕を横に突き出し歩み来るそれを見た時、マルコリ又は恐怖した。

あれは人間に敵う相手ではない。今、戦おうとしているエルフよりも恐ろしい存在。

マリコリも戦場を体験し、修羅場を超えてきた。

だからそこそわかる、恐怖。

そして、コルベールも感じていた。

”炎蛇”と恐れられた過去を持ち、無数の生命を奪ってきた彼だからこそわかる。

東方に見えるあの黒い影から吹く風に含まれる殺気を。

オストラント号がカズバの塔の中腹にあるバルコニーに接触した時、コルベールは意識を切り替えた。

サイトくとミス・ウエストウッドを救出し、脱出する。

この計画に変更はない。なにが起きようと。

コルベールは杖を手に甲板からバルコニーに飛び降り、音もなく着地する。

バルコニーの床は見たことが無い材質だったが、頑強な作りである事を感じた。

人の気配は無い。コルベールは杖を持つ右手で無く、左手を上げる。

そして緊急事態にそなえ、早口で唱えた詠唱と共に杖を炎がとりまいた。

コルベールの合図を見て、タバサとキュルケ、そしてギーシュも続く。

エレオノールは甲板で待機した。エルフの防衛隊からの攻撃にそなえるためだった。

船と眠るルイズ - 妹を守る役目である。

ブロンドの髪をかきあげ、メガネの下の鋭い眼が周囲を見渡し、警戒する。

「…あなたは行かないの？」

自分の背中でふとつちよのマリコルヌが蒼白な表情で震えていた。エレオノールは突破戦の際、このぽつちやりに散々な目に合わせられた事を思い出し、

怒鳴ろうと思った。

しかし、マリコルヌの怯え方が尋常でない事に気がつく。

「あんた、遠見でなにか見たのね。なにを見たのよ」

まるまっちい脂肪の乗ったマリコルヌの怯えた眼を見て、エレオノールはごくりと唾を飲んだ。

「あ、悪魔。悪魔が来るんです…おねえさん！」

抱きついてきた脂肪の感触。しかし、エレオノールはなぜか嫌悪感を感じなかった。

「バカ、男でしょ。しつかりなさい。あと、おねえさんと呼ぶな」  
その時、東方の黒い気配から光が走った。

エルフの白い街並みから一瞬で爆炎が上がり、カスバの塔が振動する。

「な、なに？」

エレオノールは眠る妹と怯えるぽつちやりを守るように抱いた。

バルコニーに降りたコルベールとキュルケとタバサは突然の爆音と振動に戸惑った。

「さっきの異様な軍勢の攻撃か。エルフと敵対関係にあるようですね。な。」

だとすれば、これは好機ですぞ！」

「そうだな。だが、残念ながら探しものはここにはいないぞ」  
突然聞こえた声。

その声の主が壁の影から現れた。

長身のその影にタバサとキュルケは見覚えがあった。

「あなたは！」

タバサが捉えられたアーハンブラ城で戦ったエルフ。

ジョゼフ王に協力し、両用艦隊を消滅させた火石を作ったエルフ。そして…ジョゼフが死んだ後、心を奪われた母の解毒剤を調査した男。

ビダーシャルである。

キュルケはこのエルフにまったく手が出なかった事を思い出していた。

もしかしたら、突破してきた艦隊よりも強敵かもしれない。

「おや、ガリア王…いや、今は双子の妹の”悪魔”が王だったか。他の者も手練と見える。あの少年はよほど人徳があるのだな」

コルベールは目の前の男が話しに聞く強敵のエルフであると察した。

そして、その言葉からサイトの事を知る人物である事も。

「…わたしはこの子らの教師のコルベールと申します。

あなた達にさらわれた生徒を救出に来ました。

彼らはここにはいないのですか？」

「わたしはビダーシャルだ。この出会いに感謝を」

その時、新たな爆音がして塔が震えた。先程よりも強い揺れだった。

ビダーシャルは窓から迫り来る黒い影をにらみ、整った口を開いた。

「その通りだ。彼らは先日、自らこのネステフから脱出したのだ。

入れ違いになったな。残念だ」

「ミスタ・ビダーシャル。彼らは今どこにいるのですかな？」

「まちたまえ。来るぞ」

ビダーシャルの声が低くなった。それは戦闘の意志を含んでいた。突然、バルコニーの窓から黒い影が走った。

突然の襲撃に戸惑うコルベールらに影は走った。

しかし、影はコルベールの直前、なにもない空間に弾き返された。

ビダーシャルの先住魔法「反射」である。

「ウギイツ」

奇妙な声を発した黒い影の着地を炎と氷の矢が襲う。

キュルケのファイヤーボールとタバサのウィンディアイシクルだ。しかし、影は手にした剣で氷の矢を切り払い、再度の跳躍で炎を避ける。

その脚に炎の蛇がからみつく。

コルベールの炎の蛇は瞬く間に影に絡みつき、バランスを崩した影は塔の下へ落ちていった。

「ミスタ・ビダーシャル！ 彼らは？」

「東方からの恐るべき敵、”クロサギ軍”だ。残念だが、ネステフの防衛網は突破された。

空軍もその戦力を大きく失ってしまっている。制空権を失ったと見ていいだろう。

君たちのせいでもあるが、な」

「あなたたちがサイト達をさらったからじゃないの！」

キュルケが怒りの視線をビダーシャルに向けた時、ビダーシャルは頭に手をあて、目を閉じていた。

その時、タバサの傍らに青い竜がはたいて降りてきた。

「おちび！ ヤバイのね！ 黒いのがいっぱいいくるのね！」

タバサはメガネの奥の冷静な視線をビダーシャルに向けながら返答する。

「先生。あのエルフは嘘は言わない。サイトがないのなら、船を動かすべき。」

シルフィード、あのエルフはなにをしているの？」

シルフィードは憎々しげにエルフを見つめた。

シルフィードはアーハンブラ城でタバサを守る為、ビダーシャルに戦いを挑み、破れている。

「念話なのね！ かなり離れた相手と念話してる…相手は…サイトなのね！」

キュルケとコルベール、そしてタバサが才人の名前を聞き、笑顔をつくった。

「おお！ サイトくんか」

ビダーシャルが目を開き、喜ぶ3人と一匹に顔を向けた。

「ああ。その通りだ。相変わらず無茶な少年だな。」

そのまま君たちの国へ逃げ延びると言ったのだが：君たちが来ている事を伝えたら、

こっちに戻ってくるそうだ」

「さすがサイトね！ ねえ、ジャン。」

そうと決まればこんなところから逃げて、サイトと合流しましょう」

3人と一匹は頷き合い、バルコニーの端に接舷しているオストラント号の方に向いた。

「まちたまえ。ミスタ・コルベール。頼みがある」

背中にビダーシャルの声をうけ、コルベールは振り返った。

「ミスタ・ビダーシャル。私たちが頼みを受ける道理がありますかな？」

「承知している。しかし、このネスネフの首都アデールはクロサギ軍の侵攻により、

大変危険な状態にあるのだ。我々、戦士は戦う。しかし、子供た

ちはそうはいかない」

コルベールはビダーシャルからの頼みを理解した。

「なるほど、女性や子供を」

「ああ。あなたの船で、共に逃げ延びてもらいたい」

そして、ビダーシャルは深くあたまを下げた。

「そういう事ならば、で、保護すべき方々は？」

ビダーシャルの背後の影は通路になっていた。

その通路から人影が溢れてきた。女性のエルフ、幼い少年、少女達。

しかし、その人数は思ったより少ない。20人もいないだろう。

「これだけなのですか？ 船に載せられる人数に限りはありますが

…まだ載せられますぞ？」

ビダーシャルは悲しげに笑った。

「我々も一枚岩ではないのだ。議員関係者はすでに撤退を済ませて  
いる。」

ここに居るのは孤児や病人なのだ」

コルベールは笑顔で答えた。

「了解しました。さ、みなさん、わたしの船へ」

キュルケは快諾したコルベールに一瞬、慚然としたが、すぐに準備をするために船へ走った。

エレオノールは突然のエルフの乗客に戸惑ったが、事情を聞くなり、すぐに行動した。

マルコリヌの尻を蹴り、エルフの少年少女達を船室に案内させる。シエスタは船室の準備に船内を走り回っていた。

ルイズは指揮を取るエレオノールの足元で眠っている。

ビダーシャルとコルベール、そしてタバサが東方から迫り来る黒い影を見つめていた。

上空を東方風の屋根をした奇妙な物体が通り過ぎ、爆音が響く。

「エルフの国はどうなるのですかな？」

コルベールの問いにビダーシャルは無表情で答えた。

「生き延びれば、また国は作れる。つく。今は逃げる、それだけだ」

ビダーシャルの声に苦鳴が混じった。その額に汗が流れるのをタバサは見逃さなかった。

「あなた、もしかして。このあたり一体に「反射」をかけているの  
？」

「ああ。キニンやキモンの侵入をゆるせば、脱出は難しくなるから  
な。」

おっと。彼らが来たようだ」

東方、すなわちクロサギ軍の軍勢が迫り来る方向の逆から、バル  
コニーに竜が舞い降りた。



首都の海路に到着次第、急ぎアリエーが呼び寄せた竜に乗り換え  
た才人達だった。

その背には竜を操るアリエーとルクシャナ、そしてティファニア  
の姿も見える。

「オストラント号！ みんな、来てくれたんだ！」

竜から飛び降りた才人に警備していたギーシュが駆け寄った。

「副隊長！ 生きていると信じていたよ！」

「いきなりの出迎えがお前か！ うれしいぞ、このやるし！」

その時、上空をキモンが通り過ぎた。

瞬間、オストラント号から閃光が走る。

「まずい！」

コルベールが叫んだ。

ビダーシャルが才人達を入れる為、「反射」を部分的に解除した  
隙をつかれたのだ。

被弾したオストラント号の右翼のプロペラ部分から爆発炎上する。

「シルフィード！」

シルフィードに乗ったタバサが急行し、氷雪魔法により消化する。

しかし、右翼のプロペラは大破していた。

「まずい…推進力と浮力をになう右翼と水蒸気機関を一基、破壊さ  
れた…」

コルベールの顔色が蒼白になる。

「せ、先生！ オストラント号が！」

再会の感慨も無く、焦った才人がコルベールに駆け寄る。

「すまん。「反射」を開けた隙を突かれた。ミスタ・コルベール。  
船の状況は？」

「推進力はなんとかできますが、浮力が足りません。

なにせ、巨大な船ですから…風石の数が不足しています。

このままでは脱出は難しいでしょう…」

そこへアリエーとルクシャナが駆け寄ってきた。

「叔父様！ 大丈夫ですか？」

「蛮人。風石なら、このカスバの塔に貯蔵してある。どのくらい必要だ？」

コルベールが必要な風石の量を伝えた。相当な量である。ビダーシャルは即断した。

「アリイー、急ぎ風石の手配を。しかし、時間が必要だな…」  
「時間…か」

時間が必要。

才人は一人、つぶやいた。

窓の外に見える黒い軍勢は、すでに黒い模様でなく、一体一体が視認できるほどになっていた。

風景に広がる地平を埋めるほどの敵キニン。

そして、その奥に無数に立つ、瓦屋根の…そう、神社に脚を生やしたような戦闘兵器。

とりあえず、才人は昔見た映画からもじって、” 神社ウォーカー ” と名付けた。

さらに、空を飛び、エルフの街を蹂躞するキモン。

その規模は、アルビオンで七万の敵と立ち向かった時をはるかにしのいでいた。

しかし。

「俺が時間を稼ぐよ」

ビダーシャルはオストラント号が発射できるようになるまで「反射」をかけ続けてもらわなければならない。

アリイーには風石を運んでもらわなければならない。

タバサには「反射」を抜けてきた敵に備えてもらう必要がある。

コルベールはオストラント号の運用に必要な不可欠な人物だ。

敵を止め、時間をかせげるのは自分しかない。

「バカな。蛮人の戦士よ、それは無駄死にだ」

ビダーシャルの言葉に、才人は答えた。

「無駄なんかじゃねーよ。それに俺は死ぬつもりはさらさら無いぜ」  
才人はオストラント号に向けて歩き出した。

甲板で眠るルイズの姿を見ている。

「才人くん！ 我々は君を助けに来たんだ。君を失ったら意味が無いぞ！」

「先生、俺は、みんなが助けに来てくれた、その事で胸がいつぱい  
です。」

叫びたくなるほど、嬉しいです。

そんなみんなを死なせるわけにはいかない。絶対に」

才人はオストラント号に乗り込む少年少女達のわきを軽やかに飛び越え、甲板に立った。

「あなた、無事だったのね！」

避難状況を指揮するエレオノールが、厳しい顔を少し笑顔色にそめて言った。

「お姉さん、ありがとうございます」

「…ふん、少しは貴族らしくなったじゃないの」

深く礼をした才人を見て、エレオノールは少し頬を赤く染め、そっぽをむいた。

才人はその足元で眠るルイズを見た。

しずかにしゃがみこみ、静かに眠るルイズの顔にかかった髪をぬぐった。

そのまま、愛おしさをこめ、ルイズの頬に両手で包む。

「ルイズ、助けに来てくれてありがとうな。」

思い出したよ。アルビオンで七万に立ち向かった時…俺達、結婚してたんだよな」

才人はルイズの唇を親指で優しくなでると、唇をあわせた。

あれからいくつもの出来事を超え、なんどもキスをした。

深く、激しいキスをしたこともあった。

それ以上はできなかつたけど。

「好きだ。ルイズ。あらためて言う。好きだ」

唇を少し離し、才人は心からの言葉を伝えた。

強くルイズの身体を抱きしめた。

温かいぬくもり。その感触を心に刻む用に。

時間にして数秒。しかし、才人は身体に湧き上がる力を感じた。

静かにルイズから離れ、優しく寝かせた後、パーカーを脱ぎ、ルイズの胸にかけた。

そして、才人は立ち上がる。

「だから、俺、行くよ。お前を、みんなを守るために」

船を降りた才人を追って、タバサが走ってきた。

「わたしも行く。わたしはあなたを守る」

才人は首を振る。

「ダメだ。タバサ、お前はみんなを守ってくれ」

「いや。絶対に行く。あなたを一人にはさせない」

才人はタバサの両肩に手を置いた。

「お前にしか頼めない。ルイズを守ってくれないか」

タバサを見つめる才人の目が全てを語っていた。

タバサの青い眼から、涙が一筋流れる。

才人はタバサの頭に手をのせ、笑いながら言った。

「…ごめんな」

才人は、ビダーシャルの元へ歩いてきた。

「おい、武器庫を覚えてくれ。あるんだろ？ 俺の世界の武器が」

その問いにはルクシャナが答えた。

「わたしが案内するわ。こっち」

軍勢が迫るまでその時間は無い。ルクシャナを追いかけだすサイトにビダーシャルが言った。

「君は…聖者アヌビスとは言わんが、近い存在だな。尊敬する」

「よせやい。俺はただの日本人だぜ」

武器庫に入った才人はすぐ、ルクシヤナを船に戻した。独特の空気がただよう部屋には、銃器が立てかけられていた。マシンガン、バズーカ砲、手榴弾、ガトリング砲。弾薬や刃物などもあった。

「おいおい…俺はコマンドーじゃないんだから…」  
愚痴りながら、部屋の隅にあったリュックにさえそうな武器を詰めていく。

ガトリング砲と帯のような弾薬も持ってみたが、意外とすんなり持つことができた。

ガンダールヴの能力によるたまものだろう。

「フルアーマー・ガンダールヴってやつだな」

その時、才人の足元に銃弾がいくつか転がった。

ガトリング砲を小脇にかかえ、才人はしゃがみ、その銃弾を拾った。

その時、脳内で異様な情景が広がる。

日本の武士のような兵士達が戦っていた。

相手は…いま、迫りつつあるキニン達だった。

才人は背中に背負ったデルフリンガーが宿る刀を抜いた。

「相棒、さっきキニンを切った時に気がついたんだが…」

「うん。この刀、俺の国の日本刀だと思っただけだ…いや、たしかにそういう情報を読み取っただけだ」

「そうだね。この銃弾を見るまで、その機能に気が付かなかった」

「うん。勘違いしてた。俺の世界の刀じゃない。無名の刀でもない。名は…」  
「十字剣」

刀の鐔の手前、縁のところには四角い穴がある。

ガンダールヴの能力が教えてくれた。この銃弾は、この刀の穴に装填する物だと。

弾を込める事により、気合を刀の力とし、鋼鉄をも切り裂くエネ

ルギーを発する刀。

これはキニンを切るための刀だったのだ。

「こりゃ…いい感だな！ 運命は俺に勝ってって言ってるね」

「そうかもしれないね」

才人は十字剣の気合が込められた弾をもてるだけつかんだ。

その中に白い弾があるのに気がつく。

弾の底に漢字が一文書いてあった。

「心」

才人は、心に念じた。

この十字剣を使って戦った、知らない世界の侍さん達。その心、俺にも貸してください。

そして才人は大地に立った。

眼の前の視界に広がる大地全体に黒い敵がいる。

その向こうから、立ち並ぶ神社ウォーカーからの砲撃が頭上を通り過ぎる。

唸りをあげて通過するビームのような光弾。かすめただけで皮膚がチリチリと焼ける。

「なあ、デルフ」

「なんだい、相棒」

「俺、今度こそ死ぬのかな？」

「まあ、そうだろうね」

「前みたいに助からないかね？」

「無理、だろうね」

「そうかい」

「うん。相棒はきつと、こういう運命にあったんだね」

「やだなあ、死にたくないなあ」

「かつこいいのがだいなしだぜ、相棒」

「だって、俺、ルイズとしてないんだぜ」

「じゃあ、逃げるかい？」

「それじゃ、ルイズを守れない」

「うん」

「行くか、相棒」

「行こう、相棒」

一人だけの合戦がはじまった。

まずはキモンを仕留める必要があった。

映像追尾式のミライルランチャーから誘導弾が煙を引きながら発射された。

キモンが爆炎を上げて墜落して行くのを確認した才人は、次の行動に出た。

ロケットランチャーなどの遠距離兵器だ。

一体の神社ウォーカーの屋根が爆発し、崩れていく。

遠距離火器を撃ち尽くしたら、ガトリング砲の出番だ。

周りが全て敵。才人の意識は戦闘のみに集中された。

やがて、中距離兵器も弾切れとなる。

後は接近戦あるのみ。

雄叫びを上げ、キモンをも越える速さで敵軍に突撃し、十字剣で切りまくる。

無限とも思えるキモンを十字剣の気合の光が切り倒した時、バランスが崩れた。

右前のめりに転倒する。

才人は、右脚の膝から下が無い事に気がついた。

すでに全身、傷だらけであった。

どのくらい時間をかせげたのだろうか。

ルイズを逃がせたのだろうか。

身体を転がし、地面を這いながら、手榴弾を投擲する。

爆風がもたらした煙の中で地面を転がりながら、近づくキモンの

気配に斬りつけた。

「相棒、船が無事に脱出したよ」  
デルフリンガーの声を耳にした才人は、すでにボロボロになっていた。

十字剣を握る指から力が抜ける。  
才人が最後に眼にしたのは、周りをとりかこみ、刃をかまえて刺そうするキニンの集団だった。

日が暮れようとしていた。

夕日が戦場を茜色に染めていく。

無数のキニンと数台の破壊された神社ウオーカーが残された大地。すでにクロサギ軍の軍勢はいなかった。撤退したようだ。

青い竜が夕日の空を飛んでいた。

瞬間、桃色の髪の少女が戦場に出現した。

瞬間移動の魔法であった。

サイトのパーカーを来た少女は、動かないキニンの中の大地を彷徨う。

愛する使い魔の名前を叫びながら。

やがて、夕日を反射して光る日本刀を発見する。

日本刀は地面につき立っていた。

少女は半狂乱になりながら、日本刀にかけよった。

「相棒は立派に戦ったぜ、嬢ちゃん」

少女にはその声は聞こえていなかった。

探し求める恋人がいない。

恋人の愛刀は見つけた。しかし、愛する使い魔の姿が無い。

「サイト、サイト、サイトはどこ？」

日本刀を手にしたまま、ルイズは膝をついた。

その横に青い竜と、青い髪の少女が佇む。

ルイズの足元に拳銃と銃弾が落ちていた。

その中に白い銃弾があった。



ルイズは白い銃弾を手にする。その銃弾の底には文字が書いてあった。

「心」

ルイズはその文字を読めない。

しかし、心にサイトの笑顔が浮かぶ。

愛するサイトの声が聞こえた。

ルイズは叫んだ。

愛するサイトの名前を。

その声は夕日に沈む戦場の後に、いつまでも響いていた。

02 中編 「不知火のごとく」(後書き)

「後編」に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1265ba/>

---

ゼロの使い魔異伝 ゼロの未来忍者

2012年1月9日03時48分発行